

# 小泉八雲のアメリカ時代

高瀬彰典

Akinori TAKASE

Lafcadio Hearn's American Days

【キーワード：新聞記者、フランスロマン主義文学、クレオール、ルイジアナ】

## 1. 不幸な生い立ち

ラフカディオ・ハーン（婦化名、小泉八雲）の家庭的な環境や生い立ちは複雑であり、決して恵まれた家庭に生まれたのではなかった。彼は実に数奇な運命を辿った人物であり、正確には家庭を持たなかったと言える。ハーンの伝記はその波瀾万丈の特異な生涯のために、国内外で数多く出版されてきた。中には、ハーンの商品よりも彼の生涯の伝記的事実に関心が集まり、彼を主人公にした小説風の創作的伝記物語まで出されている。ハーンの世界に内外の多くの研究者や読者が魅了されるのは、彼の人生と文学に他の追随を許さない特徴的な魅力が存在するからである。

ハーンは1850年の6月27日に、ギリシアのイオニア群島のレフカス島の小さな町で生まれた。父親はチャールズ・ブッシュ・ハーンというイギリスの軍医で、母親はローザ・アントニオ・カシマチというギリシア人であった。両親の結婚は双方の親族から祝福されなかった。1848年4月にチャールズが島に軍医として駐留していた時に二人は出会い、熱烈な恋愛の結果イギリス軍に敵意をもつ地元のプロテスタント教会の猛烈な反対にもかかわらず、1849年11月にギリシア正教の礼拝堂で強引に結婚した。

父親がイギリス領西インド諸島へ軍務で赴任することになると、ハーンは2才の時に母親と共に父親の実家のあるアイルランドのダブリンへ移住した。南国育ちのギリシア人ローザには、天候も風俗習慣も異なったダブリンでの生活は適応しがたいものであった。父親の親族にはローザの理解者など存在せず、異国から来た異民族を醒めた目で遠くから眺めているばかりであった。赴任先から帰国した父親チャールズは、全くダブリンでの生活になじめないローザに失望し、かつて恋人であった未亡人と親しく交際をするようになる。母親は英語やアイルランドに馴染めず、宗教的にもアイルランドのプロテスタント教会とギリシア正教では相容れず、次第に精神に異常をきたすようになり、突然、彼の前から姿を消してしまうことになる。健康を害し精神的にも追いつめられ

たローザは、チャールズの思惑通りに離婚し、大叔母サラ・ブレナンに4歳のハーンを預けてギリシアに帰ってしまう。その後母親は子供との面会すら認められなかったため、二度と母子が再会することはなかった。母親はその後再婚するが、さらに激しく精神に異常をきたすようになり病院で死亡する。父親はかつて恋人であった未亡人と再婚し新たに子供もできるが、赴任先のインドからの帰国途中で船上で病死する。

両親から同じように見放されたが、ハーンは父親を憎しみの対象にし、母親を賞賛と憧れの対象にした。自分の長所はすべて母親ゆずりだと考え、自分の不幸な生い立ちやその後の苦難の人生の責任は母親ではなく、ひたすら母親も被害者だと信じた。父親のせいでは母親は酷い目にあつたと同情し、いつも母親を聖女のごとく思慕していた。騙されやすい母親は父親を信じて裏切られ、自分と同じ辛い目に会わされた信じ自分自身の慰めとした。母親が自分を見捨てたことはよくよくの理由なので、弁護すべき被害者だと思ひ込んだのである。父親は冷酷でまったく自分を可愛がってくれなかったため、怖くて親しみの持てない存在になっていた。ほとんど記憶のない母親を愛情に満ちた優しい女性と理想化して、ハーンは浅黒い肌と茶色い瞳の母の国ギリシアを東洋的と把握し、母親や自分に無情で冷酷だった父親を嫌悪すべき西洋の横暴と感じていた。父方にはアイルランドのケルト的な血筋やジブシーの血統までであるとされ、実際彼の気質にはその影響が多分にあつたが、父親の親戚の大叔母やその他の人達に打ち解けず、母不在の打撃は大きく、彼は誰からも心からの愛情を受けることがなかった。

ハーンは父親は代々軍人の家柄という旧家の生まれで、軍務のため海外で暮らすことが多かった。祖先はケルトとサクソンの混血で軍人や芸術家や学者を輩出した名家であったが、ジブシーの血も流れているとされる家の血統から、ハーンは複雑な混血の気質を受け継ぎ、放浪する知的探究者としての宿命を背負うことになる。父親の弟はパリで名を知られた画家であったし、父親も若い頃はロマンティックな詩的気質を持っていた。父親は頭が良くて文武両道を器用に使い分け、詩的情緒を十分

に理解し歌を素晴らしい声で歌った。しかし、彼は激情に走りやすく、前後の見境なくギリシアの島で強引にハーンの母親と結婚して、熱情が冷めるとすぐ離婚し以前の恋人と再婚した。母親がギリシア人であったことが簡単に離婚した理由であった。再婚相手の白人女性に対するハーンの反感は根強く残り、西洋に対する根深い猜疑心を彼に植え付けた。再婚してインドへ行った父親は、病に倒れスエズ運河の船上で帰国途中で48歳で亡くなったが、皮肉なことに、最も憎んでいた父親の気質をハーンは遺伝的に多く受け継いでいた。父親からロマンティックなものに憧れる性格を受け継いだ彼も、遠く各地で転々とした生活を繰り返し、異国の日本で結婚生活を過ごし遠い極東の島国で日本人として亡くなった。ハーンは有色人種である日本女性を妻としたが、父親のように妻子を捨てたりはしなかった。自分は父親のようなことは絶対にしないという断固たる思いが、彼に日本帰化を決断させて西洋に帰ることを止めさせ、妻の親族でさえ喜んで世話をしようとした。

両親の離婚後、子供のいない熱心なカトリック信者の大叔母がハーンを引き取った。冷徹で厳格な宗教的雰囲気漂わせていた大叔母は、それなりの同情と打算で自分の後継者として期待し、厳格な宗教教育を与えるためにハーンをイギリスやフランスのキリスト教の寄宿神学校へ入れた。しかし、その劣悪な環境と非人間的な厳しい教育のため、彼は終生キリスト教に背を向け反発の念を深めることになった。しかも、牧師にしようとした大叔母の計らいで送り出されたイギリスのダラムの神学校アショウ・カレッジ在学中、遊戯中に縄の端が左眼を直撃してハーンは左目を失明した。元来弱視であったため、残った右眼への負担は並大抵のものでなかった。残った右眼を酷使したため、右眼が異様に膨れ上がっていたと言われており、傷ついて失明した左眼を手で無意識に隠す癖が身についていた。容姿の劣等意識が固定観念のように彼を苦しめ、不安定な精神と内気な性向を一層強めた。ハーンは激しい運動や遊戯から遠ざかり、ますます書物の中の想像の世界に傾倒するようになった。ティンカーによれば、彼は頑固に汎神論者を標榜したために、アショウ・カレッジを退学させられることになる。<sup>①</sup> 大叔母はこの不名誉な退学処分を憤慨し、ハーンに対する同情も理解も無しに、冷たくすぐに彼をフランスのイーヴトウ・カレッジへ送ってしまう。しかし、就学時期については、ステイーヴンソンによれば、ハーン12歳の時、すなわち1862年にフランスの学校へ1年余の間、それから1863年9月から1867年10月まで4年間、13歳から17歳までの間イギリスの学校へ送られたと考えられている。<sup>②</sup>

フランスの学校についての入学時期など詳細は一切不明であるが、アショウ・カレッジ以上に陰鬱で厳格な宗教的規律や非人間的な強制的な生活、屈辱的な抑圧を体験していたことは確かである。ハーンのフランス語の語学力は、その後終生脳裏から消えない寄宿学校での痛ましい経験と引き替えに手に入れたものであった。このような抑圧的で冷徹な寄宿学校の中で、不毛な教義に反抗す

るかのように、彼はヴィクトル・ユゴーやゴッテなどの情熱的で快楽的なフランスロマン主義文学の世界に陶酔するようになった。その後フランスの寄宿学校在学中に出資した甥の事業失敗のために大叔母が破産し、学費の援助もなくなりハーンは中退する。両親に見放され、片目失明という障害を抱え、さらに大叔母の破産後、裕福な父方の親戚の誰からも援助の手をさしのべられることもなく、かつての女中が嫁いだ家に身を寄せるようにとロンドンへ放り出される。異端視され反抗的になった、隻眼の風変わりなハーンを援助しようと申し出る者は、裕福な親族の中でも誰一人としていなかった。ハーンはイギリスとフランスのイエズス会の寄宿学校で随分辛い日々を送って来たが、頑迷な大叔母と破産をもたらした甥のために、学校教育を途中で退学し遺産相続も叶わず孤立無援の身で見捨てられた。両者共にイエズス会の信徒であったために、彼は自分の人生の転落をイエズス会の陰謀だと考えた。アショウ・カレッジでの汎神論への傾倒や異端宣言、フランスの寄宿学校でのロマン派文学への陶酔が、キリスト教会の憎しみの原因となったと思ひこみ、その後の強烈な被害者意識は終生ハーンの脳裏から消えることはなかった。大叔母のプリネン夫人の遺産を自分から奪い去ったのはイエズス会の陰謀だと彼は信じていた。

このように、4才で母と生別したハーンは、父方の大叔母のもとに引き取られ大きな屋敷で育てられたが、強引に寄宿学校へ送り出されて、後に破産すると冷たく突き放され、路頭に迷った少年に親戚の誰一人として救いの手をさしのべる者はいなかった。ハーンも父親に似て生来快活で悪戯好きであったが、片目を失明して以降、内向的で陰気な性格に変わった。母親と生別し、重苦しい大叔母と暗い幼年期を過ごし、彼は13歳から17歳までイギリスのダラムの神学校での寄宿生活を強制され、さらにフランスの学校に短期間追いやられた。このような親族の愛のない扱いや厳格なキリスト教教育を強制的に受け、さらに、左眼を失明したことが決定的に大きなトラウマとなった。お茶目で明るい性格だったハーンが、暗く落ち込んでいるところに、さらに大叔母が破産して中途退学を余儀なくされることになる。大叔母はハーンよりも遠縁の青年を大事にするようになり、無謀にもその事業に全財産を出資し無一文になってしまったのである。愛情はないが裕福な大叔母の庇護の下で可能であった豊かな経済的基盤を彼は無くしてしまう。学校を中退した後、誰からも見放されたハーンは、ロンドンで一年程の間悲惨な日々を体験した挙句、親族から追い立てられるようにイギリスを見限り、アメリカに新天地を求めて行く決心をする。1869年に19歳のハーンは移民として大西洋航路でアメリカに渡った。親からも親族からも見放され、天涯孤独を悟った時、彼の当てのない放浪の人生行路が始まったのである。不運と不幸に翻弄されながら、極貧に苦悶し変人奇人というべき生活を送りながらも、運命に立ち向かう不撓不屈の精神と潔癖な道徳心で逆境を生き抜き、自らの人生の目標を見失うことなく希

有な作家として自己実現していく姿には、ハーン文学の解明にとって精査して考察すべき多くの唆や価値を有するものがある。

## 2. シンシナティ

世間の冷たさを味わったどん底の生活の後、ロンドンで浮浪者のように放浪する姿に愛想をつかした親戚から、アメリカへの片道切符の金を渡され、ハーンは孤立無援の身で新天地へ出発する。冷たく見放した大叔母とでたらめな投資で破産の原因を作った遠縁の青年に対する激しい反発のために一切の金銭的援助を頼まず、彼はニューヨークでもどん底生活を余儀なくされた。ニューヨークでしばらく窮乏生活をした後、オハイオ行きの移民列車でシンシナティへと旅立つ。ほとんど無一文で馬小屋の干し草の中で夜を明かしながら、彼は放浪の旅を続けることになる。イギリスの神学校での不運とその後の悲哀で人生の辛酸を味わいながらも、新天地アメリカでは大自然に囲まれて、どこか楽天的に魂の漂白を続け、彼は自然と人間を観察しながら未知の世界や異界を探索するという人生の基本的姿勢を確立していく。

親戚縁者の誰からも庇護されることなく、非人間的な環境のキリスト教神学校の中でひどい教育を受けた体験から、西洋文明に懐疑的になりキリスト教にも反発を深め、何か陰謀のために艱難辛苦の身の上に陥ったという被害者意識と強迫観念は、彼の消え去ることのない終生のトラウマになった。ハーンは徐々に西洋的なキリスト教文化に根強い反発感を抱くようになり、非西洋世界、非キリスト教世界、東洋的な異文化に強い共感を持つようになった。近代の資本主義や功利主義を信奉する西洋文明批判を募らせたハーンは、同時に、アメリカの大自然に触れながら、数億の太陽が存在するという壮大な宇宙の意識や詩的感性を育てていた。このような独自の文明批評家的な立場から人間と社会を考察したハーンは、脱西洋から異文化や異界への探究という彼の生涯の研究課題を追求することになり、その後終生眼に障害を持ちながら執筆活動を通して、文学や異文化研究に孤軍奮闘を重ねて精進するのである。

イギリスのリバプールから船でニューヨークに着いてしばらくして、ハーンは大都会の喧噪から追われるように無一文同然で、親戚から紹介された知人を頼りにシンシナティへ移る。しかし、まったく冷淡で相手にもされず門前払いで、何処に行っても誰も親切にしてくれる者はなく、彼はここでも無縁無頼の輩であった。何とか人並みに生きて行けるまでには、相当な期間の艱難辛苦が必要であった。それまで大叔母のもとで経済的に恵まれた生活を送っていた彼は、突然厳しい弱肉強食の世界に放り出された。ロンドンからニューヨーク、シンシナティへと移り住むが、まったく世間知らずで生活力もなく家賃も払えず困窮を極めた。その間にいろいろ仕事を転々とするが、自分の持ち物や金を取られたり、数字や

勘定などの現実的処理能力が欠落していたため、彼は19歳でも周囲と上手く溶け込んでいく処世術を持たなかった。世話してもらった職に馴染めず、電報配達人、下宿屋の下男、使い走りなど職を転々とし、召使いのように暖炉に火を起こしたり石炭を運んだりして、食い扶持を稼ぎ、喫煙室の床で眠るという状態が1年半ぐらい続いた。しかし、彼は時間があれば公立図書館へ行って読書して、絶えず文学研究を続け文章を書く練習をしていた。そして、ついにこのように世渡りの下手で不器用なハーンは、父親代わりのように相談に乗ってくれる人物ヘンリー・ワトキンに幸運にも遭遇することになる。ワトキンも独学の人で素朴で実に思いやりの深い人物であった。

無一文で下宿を追い出され、路頭に迷っていた困窮の時に、この年老いたイギリス人の印刷屋が、ハーンを気に入って世話をするようになったのである。無給だが店で寝泊りし、彼は印刷の仕事を覚えるようになる。孤独なハーンに理解のある話し相手ができ、彼は食事の心配もしなくてもよくなる。本の裁断機からの紙屑で作った温かくて気持ちのいいベッドが、彼に救いの安息場を与えた。ワトキンは風変わりな孤独なハーンの気質をよく理解していた。親に見離され親族にも追い出されたハーンは、人生の早い時期にいやと言うほど辛酸を体験していたので、病的に過敏で猜疑心や被害者意識に取り付かれ、激情に駆り立てられたりしたが、親のような眼差しでワトキンは笑いながら彼を保護し手元に置いた。彼のもとでハーンは印刷の知識を身につけ、同じく独学のワトキンに励まされ、共に読書や話し相手の時間を過ごすようになる。心の拠り所を見出した彼は、心強い精神的安定を得て、次第に自分の進路を着実に歩むようになる。ハーンにとってワトキンとの出会いは、彼の人生の転機とも言うべき大きな幸運であった。印刷屋のワトキンはハーンに植字工や校閲の仕事を教えた。ワトキンに薦められて1872年に『トレイド・リスト』という小さな雑誌社で編集助手の職についたが、広告や集金取りの雑用に忙殺するばかりで、自分の書いた文学的文章を認めてくれないので辞めてしまう。その後、他の出版社の校正係をしながら、彼は自分の文章の原稿を懸命に書きつけた。このように、業界紙の下働きを世話してもらいながら、彼は文学的野心を持ち続けて研究や執筆に専念したのである。19歳のハーンは経済的に苦しく生活に追われていたが、人生の苦難に負けずに、若い青年の新鮮な感性を少しも失っていなかった。

ハーンは人生の早い時期から赤貧と孤独の艱難辛苦を体験してきたので、孤立無援の境涯が貧しい者や弱い者に対する洞察や同情の眼を開眼させた。ハーンは給仕や掃除夫や使い走りなど様々な下働きを通じて、下層階級や社会の裏側に生きる多くの無名の人達の生態を観察し、近代社会の暗黒面の現実を実体験として把握していた。また、社会の底辺で生きる黒人達の苛酷な労働から生まれた魂の歌に同情と共感をもって聞き入り、彼はその生き様に豊かな詩情を見出していた。柔軟な思考力と



豊かな感情が彼独自の共感する特異な精神を生みだしていた。

色の黒い風変わりな小男であったハーンは、1872年10月22歳の時に原稿を持って『インクワイヤラー』の編集長のコッカレルに会い、度の強い眼鏡で自信なさそうに、原稿を買ってくれるように懇願した。この時の自分の原稿に対する自信と世間の拒絶に対する恐怖が、彼の内面に相克する作家としての原点であった。ハーンは原稿はすでに魅力的な文体と力強い思想を持ち合わせた非凡な才能で溢れていたため、原稿は認められ新聞に掲載された。その後不定期的に記事を寄稿できるようになり、彼は2年程後の1874年に『インクワイヤラー』に正社員として採用される。書評記事作成のためハーンはひたすら勉強に勤め、文学的な素養を培い独学で古典から現代までの欧米作品に精通するに至った。さらに、彼は若い野心的な新聞記者として、都会の裏通りや底辺に住む人々、悪人や貧乏人の姿に非常な興味を抱くようになる。オカルトの降神術師、屑ひろい、奴隷黒人社会、新聞配達の子供達、殺人事件、スラム、マイノリティなどあまり誰も取材に行かないような下層庶民社会の出来事を彼は生き生きと映し出して描写したのである。

新聞社に入社して半年後に、ハーンは挿絵画家のヘンリー・ファーニーと大眼鏡を意味する奇妙な誌名の『イー・ジグランプス』という週刊誌の発刊を手がけるが、この雑誌は二人が激しく喧嘩したり、宗教問題や公序良俗を鋭く風刺するに及んで購読者が激減し、1874年6月21日から8月16日までの2か月程後に発行総数9号で廃刊となった。ハーンは手軽な内容のない雑文を書いて読者を面白がらせる商才に欠け、自分のスタイルに拘り異様で官能的な作品しか書けず、また深刻な事件を揶揄するようなファーニーの絵が世間に誤解されて、購読者が伸びず経営的に失敗する。本来、彼はフローベル、ゴッテ、ボードレルなどのフランスロマン主義作家の官能的世界に陶醉し、彼等の審美感と文学的姿勢を崇拝していた。したがって、『イー・ジグランプス』失敗の後は、ゴッテの『クレオパトラの一夜』やフローベルの『聖アントニウスの誘惑』などの翻訳にすべての余暇を捧げながら、彼独自の想像力を燃え立たせていた。隻眼で弱視であったハーンは、不健康な生活と眼の酷使で失明することを最も恐れているが、毎晩記事の原稿を大量に執筆した後、ガス灯の薄暗い明かりを頼りに遅くまで、彼の文学修業の原点である翻訳の仕事に精励していた。翻訳の仕事を通して文学の精髓を把握し自分の言葉で再表現することを彼は独力で学んでいた。

週刊誌発行では失敗に終わったが、廃刊直前に復帰した『インクワイヤラー』でのハーンのコラムの諧謔と軽妙な筆致は、失敗から学ぶジャーナリストとしての彼の特徴であり、風変わりを嗜好する彼は、生来極端から極端に走る激しい感情の持ち主で異様なものの賛美者であった。極端に恐ろしいものや極端に美しいもののみ確かな手ごたえを感じ、他のものはあまりにも移ろいやすく、彼の猜疑心や懐疑主義を止揚する程満足させるもの

ではなかった。フランス文学の煽情主義的なものに惹かれ、悪臭紛々たるものや胃をむかむかさせるものに耽溺し、この時期の彼の人生航路は地下納骨所へとつながり、墓をあばく悪鬼のように鬼気迫るものがあつた。ジャーナリストとしての感性を磨き上げたハーンは、読者の望む煽情的な記事を書き、上品な出来事ではない悪臭紛々たる事件を探り、興味津津の読者の気持ちを掴む敏腕記者として頭角を現わすことになる。

『インクワイヤラー』の記者としての単調な取材の下働きの後に、彼はしばらくすると「製革所殺人事件」を書き、その凄惨な事件現場の描写によって読者の注目を浴びた。シンシナティで記者として彼を有名にした1874年11月9日付けの皮革製作所殺人事件の記事とは、皮革製作所の労働者が関係した娘の父親や家族に殺害されるというものであった。<sup>③</sup> 焼却炉で焼かれた遺体の描写は迫真力に満ちたもので、屍体を詳細に観察して恐るべき状態を克明に報告している。焼けた頭蓋骨が砲弾のごとく爆裂し焼却炉の高熱の中で飛び散り、半分がぶくぶく煮沸する脳髓の蒸気で吹き飛ばされた様子、頭蓋骨の上部が鉤裂きに引き裂かれた凄惨な姿、燃えて焦茶色となったり黒焦げで灰と化した部分などを、視覚と触覚の両方に訴えかける巧みな描写の手腕は、記者としての力量を見事に示したものである。ハーンは読者の心を捉える壺を心得ていて、読みたがっているものを的確に提供する取材の目の付け所や、それを表現する文体には非凡なものがあつた。

死臭鼻を突く黒こげ死体のリアルな記事は、無惨な被害者の姿を独特の文体で見事に描いたものである。この奇妙で異様な事件報道の成功によって、ハーンは戦慄すべき恐ろしい事件の取材に偏愛ともいべき異常な関心を抱くようになり、他の追従を許さない独自の領域を自ら自覚したのである。この時期のハーンの精神的異様さは、幼少年期の成長過程やその後の孤立や貧困と無縁ではない。苦難して独学した時期に積み重ねた様々な思いが自己実現する手段を彼は切望していた。才気煥発の溢れ出るような記事の文章を読めば、逆境に負けずに彼が如何にひたむきに努力していたかが明瞭に分かる。製革所殺人事件の報道記事で思わぬ成功を収めたので、文学的名声への野心から誰にも書けないような戦慄すべき事件の記事に彼は憑かれたような興味を示した。事件そのものの事実関係の報道よりも、感覚的で感情的に訴えかけるような微細な部分に拘り、異様な恐怖の衝撃を読者に与える文章表現にハーンは苦心した。その後、黒人混血女性との結婚問題で解雇されて再就職した新聞社、『コマーシャル』に載せた記事「絞首刑」には、死刑執行の失敗から蘇生した少年受刑者の悲哀を描いている。<sup>④</sup> どのような境遇にあっても快樂のために弱い者いじめをすることを最大の悪と捉え、人種や貧富を超えた人間愛を彼は記事に描こうとした。19才の不良少年が再開される刑の執行に戦慄し、生への執着と死の絶望に狼狽する様子を、客観的冷静さと消えゆく生命への深い同情で彼は見事に描いている。記者としての客観的な真実の把

握と生命への畏怖の念がハーンの基本的な立場であり、残酷な社会の不条理を糾弾する正義感と同時に、人間愛に満ちた共感の精神を発揮して多くの読者を魅了した。また、仕事上で記事の取材のためなら恐怖心を克服して危険を顧みずに、治安の悪い裏町へ新たな事件の追跡に出向いていた。ハーンの観察力は微に入り細に入り実に丹念に調べ尽くし、受けた印象を常に正確に書き留める事が出来た。彼独自の繊細な筆遣いは、文学的情熱と審美感によって支えられていた。その後各地を彷徨い詩的散文を勤勉に書き続けた彼の生涯は、このようなジャーナリズムから育った彼の作家的特質によって特徴づけられている。

エリザベス・ビスランドはハーンの女性崇拜に触れて、「私の最初のロマンス」という自伝的作品を紹介している。<sup>5)</sup> ニューヨークからシンシナティへ向かう汽車で出会った女性についての淡い思い出を彼は吐露している。それは色白で民族衣裳を着て髪をブルーのリボンでとめた、背の高い灰色の眼をした19歳の気品のあるノルウェーの娘であった。この異文化を体現した娘を見た瞬間に、彼は彼女のために何でも出来るし、望むなら死んでもいいとまで思う。バイキングの子孫の輝くような娘は、無一文のハーンにパンをくれるが、彼は白人女性に対する気後れもあり、感激しても思うように感謝の気持ちを伝えられなくて、英語を理解しない彼女は誤解して怒ってしまう。喜んで生命さえ差し出すとまで惚れたのに残念と30年も前の汽車の中のシーンを彼は懐かしく回想している。

気に入った女性のためなら何でもしようという自己犠牲のギャラントリーの精神は、人間としてのハーンの特質であり、その後私生活でも作家活動においても、彼の生涯を特徴付けるものである。無一文で食べるものに困っていても、青年ハーンはロマンティズムに生きる若者であった。来日以降も、彼は車夫でも手仕事でも優れた職人芸に感激すると、正規の報酬の何倍でも支払おうとするところがあった。言葉の上手く通じないノルウェー人の娘に惹かれ賛美する態度は、彼のその後の人生を暗示しているようで興味深い。女性に対するギャラントリー精神旺盛なハーンであったが、シンシナティで同じく不遇で貧しい黒人の混血女性に同情するかのようになり結婚したが、上手くいかず破局を迎え人生の大きな転機を迎えることになる。

異文化や未知を暗示する英語圏以外の有色人種の女性に彼が強い魅力を感じるのには、ギリシア人で浅黒い肌をしていたという母親の面影が強く影響していたからである。また、アイルランドの白人の家庭で育ったハーンは、ケルト的な審美意識や神秘主義、激しい感情の起伏や遙かな未知の世界に焦がれるロマンティズムを父親の血筋から受け継いでいた。このように、両親から複雑な混血の気質を受け継いでいた彼は生来、未知のもの、異文化、異人種、美しいもの、異性、小さなもの、不思議なもの、異界、霊界などに激しく心を惹かれる性癖の人物であった。

見事な事件の取材と記事でハーンは新聞記者としての名声を確かなものとして、その後も墓地や精神科の病院などを取材した風変わりな記事で、『インクワイヤラー』の看板記者と評されるようになった。しかし、以前から親しくしていた黒人の混血女性との結婚を当時禁止していた法令にもかかわらず強行したため、1875年に新聞社をやめざるを得なくなる。ハーンは『インクワイヤラー』を辞めて後、すぐに『コマーシャル』に移籍した。シンシナティ時代のハーンの運命に大きな影響を与えたこの女性は、アリシア・フォーリー（通称マティ）という下宿屋の料理人であり、健康で元気な田舎娘であった。下宿屋で働いて暮していたが、器量よしで大きな黒い目に物思いに沈んだ表情を浮かべた奇妙な姿が、特にハーンに関心を惹いた。その美しい容姿や気立てのよさが、激情に駆られやすい彼を一時夢中にさせたのである。彼女は読み書きはできなかったが、語り部としての豊かな表現力や優れた記憶力を持っていたので、即興詩人のような座談の才能に優れていた。マティは魔術師のように迫力に満ちた様々な幽霊話を語ることもできた。ハーンはマティの霊媒としての特殊な能力について、実名を伏せて後年記事にしている。<sup>6)</sup> いまだに安らかな眠りを得ていない幽霊が道を駆けぬけて、寒い雨の夜にずぶ濡れになって森の中で現れたというマティの巧みな話術による体験談は、作家としてのハーンの描写力に生かされる。マティも幽霊を見る娘だったので、霊的な超自然現象が彼女の想像力を大いに刺激していた。ハーンの幼い頃の幽霊体験は、異界の怪奇現象に強い興味を持たせることになり、現実世界での挫折や苦難がこの傾向に一層拍車をかけ、さらに、マティとの出会いで異界や霊界への興味は膨らむのである。霊的体験において両者は共に共感するところが多かった。

シンシナティ時代のハーンはマティに始まってマティで終わった感がある。マティとの出会いの頃から、ハーンは新聞記者として頭角を現すようになる。すなわち、靈感に満ち超自然的現象を想像豊かに語るマティの影響から、社会の弱者や底辺に生きる人たちに今まで以上に強い興味を抱き、彼は意欲的な取材と執筆活動を始める。当時から彼は白人至上主義の論理に背を向け、想像力豊かな感性で文学的世界を飛翔して、異文化や異界の時空間に身を置いていたが、同じような靈感と想像に満ちたマティとの共同生活が、奇怪で異様な事件や不可思議な霊的世界を色鮮やかに描写する彼の執筆活動に大きな力となっていた。センセーショナルな事件や奇妙な超自然的現象が、彼の冷静な観察眼や推敲された文章、そして研究を重ねた文学的素養の蓄積によって、見事な出来映えの記事に仕立て上げられた。彼女の楽しい思い出や可愛い歌は彼の異国趣味を満足させ、異様で不可思議な世界を伝える彼女の小さな物語が彼に執筆を鼓舞する力を与えた。最も厳しい人生の岐路において新聞記者を志した彼にとって、マティは特別な存在としての意味を持っていた。

ハーンは背が低くがっしりした体型で、隻眼のうえに



強い近視であったから、本の上を鼻で擦るように眼を近づけて読み書きした。片目を失い醜い容貌になったという思いこみが彼の性格形成に影響を与え、自分の見苦しい容貌に必要な以上に劣等感を抱き、魅力的な白人女性とは対等につき合えないと思ひこんだ。内向的で恋愛の苦手な22歳の青年ハーンは、18歳の黒人混血娘マティと激しい恋に陥った。ハーンが疲れて仕事から帰って来ると、マティはいつも食事を温めて用意していた。彼が雨で濡れて帰ると、彼女は暖炉で乾かしてくれ、親切な母親のように世話をしてくれた。彼の孤独の長い年月の中で初めて受けた親切であった。彼は生い立ちからも、他の白人たちのような肌の色への偏見がなかった。彼の母はギリシア人でオリブ色の肌をしていたので、彼は西洋よりも東洋に属するものと考えていた。幼い頃に別れた肌の浅黒い母親に、彼は異文化や異界を感じて憧れていた。ハーンはマティに特別な感情を抱くようになり、病気にかかった時は、献身的に看病してくれる彼女を命の恩人とも思った。

1861年から1877年までの間オハイオ州は白人と黒人の結婚を禁止する法律を定めていた。この結婚は正式には認められなかったので、同棲とも言うべきであるが、数年しか続かず破局を迎える。すなわち、1874年の6月にハーンが24歳の時、21歳のマティと正式に結婚しようとしたが失敗する。マティの反対を押して違法に結婚してからは社会的制裁もあり、二人の関係は気まづくなり数ヶ月しか続かなかった。その後も同情的に接していたハーンは、自暴自棄になったマティの言動に苦しむことになる。マティとのことは若気の誤りというには、彼の心にあまりに深い傷を残した。父親と同じように激情に走ってマティと一緒に、その後別れて彼女を不幸に陥れた責任に彼は苦悶した。

マティとの関係がこじれた事で彼は非常に苦しみ、彼女が破滅するのに耐えられないほどの責任を感じ、彼女が墮落すればするほど、彼は彼女をより一層愛さねばと感じた。マティは美人ではあったが、無教養で女らしい優しさや思慮分別を欠いた女性であった。悪意はなくても責任感の欠落した子供のような人間であった。責任は自分にあり、社会的に認められない結婚をしたのが間違いだったという後悔の念は募るばかりであった。高慢でわがままな彼女に振り回され、その墮落が最悪の事態に至ることを危惧し、警察署に留置されたり、犯罪を犯すようになるのではないかと彼は心配した。

マティは1854年にケンタッキーで白人の農場主と黒人の奴隷との間に生まれた。各地を転々とした後、シンシナティに出て来てプラム街の下宿に住み込みで働き、ハーンと知り合うことになる。奴隷解放後も黒人差別は根強く、いつも弱い者や貧しい者に同情するハーンは、白人至上主義の優越感を許せないものと感じていた。同情の気持ちで知り合って2年後に彼女と違法な結婚を強行したが、それは周囲の人々を大いに驚かせた。感情の起伏が激しい直情型の若者であった彼は、想像力豊かな語り部の娘マティに心惹かれたが、現実から遊離した二人

の生活は長続きしなかったのである。

元来、異国情緒に惹かれるハーンは、有色人種の黒い肌に官能的な魅力を感じていた。前述したように、当時のオハイオ州が白人と黒人間の結婚を禁止していたにも拘わらず、彼が結婚許可を申請し却下されたことは、彼の人生に重大な転機を生むに至った。この事がスキャンダルとして広まり、1875年に『インクワイアラー』の経営者は彼を解雇した。ハーンは安い給料で『コマーシャル』紙に移らざるを得なかった。他から排斥されたり理解されない場合は、ハーンは常に自分の主義主張に頑迷に固執し、乏しい視力と不健康な生活の中で、益々誰にも書けないような美を創造して散文詩のような光り輝く珠玉の作品を書くという思いを募らせるのであった。繊細で凝り性のハーンは、完璧な作品を完成させるのに必要な余暇を切望し、記者生活の単純な日常性の中で文学的野心が死滅することを心から恐れていた。自分を排斥し認めようとしめないシンシナティを離れたいという思いから生来の放浪癖が再び頭をもたげ、新たな可能性を求めて熱帯のニューオーリンズに新奇な冒険を夢見て旅立つことになる。

熱帯の太陽、樹林、鳥や花などを賛美する彼の南方志向は、この時期に生まれた。記者仲間からメキシコ湾に位置する都市の話を知ると、耳からの鋭い感受性に恵まれた彼の想像力は、未知の南国の都市を全身全霊で想起した。特に、『コマーシャル』の主筆エドウィン・ヘンダーソンがアメリカ南部やメキシコ湾沿岸地方の風景をハーンに熱心に語り彼を魅了した。常に南国への熱い期待がハーン存在を燃え立たせていたが、隻眼の不十分な視力であったので、ぼんやりと霞んだ色彩の中で事物を認識していた彼は、風変わりな奇妙なものに神秘的なロマンスを感じる人物であった。異国情緒の未知の町は、ハーンに新たな冒険の可能性を提示していたし、直接記者仲間の話に接して受けた感動が、彼の想像力に火を付けていた。

このように、ハーンの文才を賞賛する一方で、白人社会から強い批判がわき起こったことは、その後の彼の人生を象徴するような出来事であった。すなわち、黒人女性と結婚しようとして同棲し失敗した隻眼の短身男、好戦的な意識過剰の放浪者という中傷が、彼のシンシナティでの仕事や生活環境を激変させることになった。この時アメリカ白人社会から排斥され、さらにマティとの関係も破壊されたという強烈な被害者意識を彼は持った。非情な社会的制裁によって追いつめられたハーンは、些細な感情的行き違いでも激しく裏切られたと思ひこみ、对人的友好が一気に憎悪に急変するという強い猜疑心の持ち主であった。その後ハーンがさらに徐々に白人社会から離れてキリスト教や西洋文明に背を向けて、アメリカを去り日本へ渡り、最終的に日本女性と結婚して平和な家庭を持つことになる変人奇人扱いをされ、異界や怪談など風変わりなものに異常な興味を抱く病的な作家というレッテルが、西洋では彼の評価として貼り付けられるようになった。特に先の大戦後のアメリカ社会は

ハーンを特異な人物として矮小化し、偏見に満ちた評価に終始して正当な評価を与えず、彼の存在を軽視し黙殺し続けてきた。アメリカの日本学者はハーンの描いた日本文化の諸相を無視し、特に霊的日本の姿、神道や仏教など心霊の世界、祖先崇拜などの伝統的風俗を考察の対象から除外したのである。

### 3. ニューオーリンズ

黒人混血女性との結婚が容認されず、社会的制裁として白人社会から拒絶されて記者の職を失い、もっと安い給料で他の新聞社で働かざるを得なくなるという暗澹たる状況の中で、ハーンとマティの関係は日々悪化してついに決定的な破局を迎え、1877年10月27歳の時に彼はシンシナティを去る。彼女との結婚は同情からのもので、弱者の黒人で艱難辛苦の身の上である彼女を救ってやるという気概で始めた生活は一方的なもので、対等な男女の夫婦関係にならなかった。破局した後、マティがシンシナティを去ってくれることを願っていたが、永遠に町を去ることになったのはハーンの方であった。熱情が冷めて責任と後悔に苦悶する彼にとって、自暴自棄になって墮落していくマティは確かに彼を悩ませる存在であった。

このような状況でマティとの間が険悪になり、寒暖の差の激しいシンシナティよりも南方のニューオーリンズに彼は救いと変化を求めた。仕事にもマティとの関係にも行き詰まっていたハーンは、寒気を忌み嫌い熱帯の太陽の暑い光を求めて新たな土地へと旅立つ。一カ所に長期間留まって土地や人々と馴染みすぎることは、本来自分にとって良くないという思いが彼にはあった。彼は未知の土地の人との触れ合いに無上の喜びを感じたが、一カ所に長く留まっていると、最初の幸福の幻影が消滅し不快な出来事に苦しむのであった。失意と倦怠の時がやって来るまでは、見聞したものすべてを新鮮な印象記として彼は書き残すことが出来た。異郷の地に一人孤独に苦しみながら、本当に定着できる安住の場を見つけるまで、ハーンは現実離れした夢を抱いて彷徨うロマンチストであった。マティとの人間関係の破綻、また記者としても失職して条件の悪い職場での再就職で周囲の環境は行き詰まっていたが、何よりも単なる新聞記者で終わりがたくないという強い思いが彼の心中に根強くあった。

このように、スキャンダルとなったマティの件や未知の土地を求める放浪癖から、ハーンは新聞記者としての名声をほぼ確立していたシンシナティを去り南部へと向かい、ニューオーリンズの港町で10年近く暮らすことになる。世話になったワトキン達に見送られて彼は汽車でメンフィスに行き、そこから蒸気船でミシシッピ川を下りニューオーリンズに着く予定であった。船が予定より大幅に遅れたためメンフィスで足止めを食い、僅かな所持金が底をつき経済的に困窮する。ハーンは経済的な裏付けも無しに思い切った冒険をする人物で、やっとの思

いで着いたニューオーリンズでもすぐには仕事が見つからず金銭に窮する。彼は激しやすく思い詰めると、性格的に現実問題に対して冷静に対処する計算や処理能力が欠落していた。『インクワイヤラー』を失職後、就職していた『コマーシャル』に約束通り通信員として記事を送っても、原稿料はすぐに送られてはこなかった。本来、ニューオーリンズに仕事の当てがあったわけでもなく、以前の間人間関係を全て捨て去ってしまうと、同時に彼は経済的保証も完全に失ってしまった。

しかし、経済的不安にもかかわらず、シンシナティの味気ない環境、単調な記者の仕事、嫌な気候などの全てを忘れ去り、ニューオーリンズの魅惑的な町並みの中で、ハーンは好奇心と期待で一杯であった。『コマーシャル』の読者のために、彼は生き生きとした筆致で現地報告を書き送ったが、原稿料がほとんど送られてこなくなると、『デモクラット』に原稿を持って求職活動するが、思うようにいかなかった。他のどの新聞社でも仕事にありつけず、彼は経済的に困窮するようになり、以前のホームレスのような生活の日々が続いた。空腹に耐えて公園で座り込み、希望も友人もなく彼は再び追いつめられていた。シンシナティの新聞社から時折送られてくる僅かな原稿料で食いつなぐという経済的苦境が続き、半年以上過ぎて仕事は見つからなかった。シンシナティでの状況に絶望し、失職と再就職で記者として奴隷のように他人に使われることを嫌って、彼は自由と独立を求めてニューオーリンズにやって来たが、自分の思うような仕事は見つからなかった。ストレスと健康状態悪化で、視力が弱り Dengue 熱まで発症し失明と病死の恐怖に怯える毎日が続いた。この時、『リパブリカン』の編集長ロビンソンがハーンの哀れな困窮ぶりに同情して、一年前に出来たばかりの小さな新聞社『アイテム』の編集長ビグニーに彼を紹介した。苦勞したあげく1878年6月に彼は編集助手の職を手に入れた。シンシナティで週給25ドルで新聞社の奴隷として使われるよりも、週給10ドルでハーンはのんびりとした生活を送り、一日3時間だけを仕事に費やせば、後は好きなように時間を過ごすことができた。ハーンは清貧に甘んじて二度と以前のような激務に就きたくないと思った。シンシナティの大きな新聞社に比べると、小さな職場で給料も大幅減となったが、以前より短い勤務時間で彼は自由に仕事が出来ようになった。新聞社の奴隷になることを恐れていた彼にとって、文学的活動により多くの時間を傾注出来る環境が手に入ったのである。ニューオーリンズのラテン的で陽気な雰囲気魅了されたハーンは、風変わりな複雑な気質のために周囲の退廃的な空気や非現実的な言葉の世界に神秘的な魅力を感じていた。

ニューオーリンズ旧市街の古い町並みは異国情緒を湛え、彼の美意識に強烈に訴えかけていた。彼はシンシナティで味わった黒人混血女性との結婚に起因する人種差別問題や偏見と疎外の屈辱感から解放された。人種のるつばのニューオーリンズでフランス系黒人のクリオールの人々の家族的な暖かさ、人情味溢れる土地柄に彼は非



常に感激した。ルイジアナ州ニューオーリンズはアメリカの白人的伝統を逸脱したすべての価値観を有していた。アングロサクソン至上の冷徹な論理よりも、フランス系黒人の陽気な温かい風情があり、打算的な理知よりも自然で自由な本能的感性に満ちあふれ、厳しい言葉による断罪よりも全てを許容し得るような南部黒人のジャズの音楽性があり、孤立した個人主義的世界観よりも南部独特の運命共同体的意識に溢れていた。このようなニューオーリンズ独自の風土において、ハーンは豊かな題材を見出して文才を発揮し、南部ルイジアナの本質を見事に言葉で捉えることができた。

フランスやスペインに黒人の血が四分の一ほど混じった混血女性は、ハーンにとって特に官能的な美の魅力に満ちていた。彼は既にシンシナティで黒人混血女性に魅惑されて正式に結婚しようとしたが、白人と黒人との結婚を禁じた法令によって社会的制裁を受けるという苦い経験をしていた。しかし、大胆なことを実行に移すハーンは、実際の個人的生活では非常に内気で、人との接触もごく限られた範囲でしか交流せず、職場では目立たないおとなしい人物であった。彼は外界よりも内界に熱い情熱を燃やし続けたロマンチストであった。ハーンは臆病なほどに過敏で通常の現実生活の環境に適格に順応できなかつた。失敗を数多く繰り返し辛酸を舐め尽くしたので、疑心暗鬼が強く一度不安を感じると、すぐに自分の殻に閉じこもってしまい、自分の想像や本の世界に架空の現実を作り出す傾向があった。このような傾向が生み出した異国趣味から美しい黒人混血女性に対する熱い情熱が相変わらず燃え続けていた。

フランスの植民地であったニューオーリンズは、紺碧の空と輝く太陽の下で、南国風の家屋の町並みが異国情緒をとどめる土地であり、ハーンの心を惹き付けて離さなかつた。停滞した時代遅れの南部の町並みや自然が、彼の思い描くロマンティシズムの格好の場となり新たな文学的活路を与えた。古い町並みの半ば廢墟のような姿は、特に彼の審美眼にとって哀感を漂わせる麗しき南の天国であった。南国の熱気と官能的な哀感こそ、彼の審美意識に強く訴える魅力である。輝く太陽の熱気の中で半ば朽ちた町並みに、死者の面影を退廃的な哀感と共に看取するハーンの感受性は鋭い。歴史の流れから忘れられた過去の遺物のような町並みに永遠の相を垣間見る彼の死生観や宇宙意識は、南国で親密に接した忘れ去られ滅び行く人々の悲哀や時代から取り残された少数者の感情と深く結びついている。

未だ人間の手が加えられていないルイジアナの大自然は、精錬されていない巨大な富であった。ハーン独自の審美感にとって、半ば荒れたルイジアナの姿は楽園であり、美しくも悲しいものであり、ルイジアナの太陽を見て彼は涙した。ルイジアナの太陽の下で半ば荒れた古い町並みに接したとき、接吻を求める若い女性の死に顔に似た哀感を偲ばせていると彼は感じた。不思議な感性で南国への思慕に官能的に陶醉する姿には、彼の熱狂しやすい性癖が如実に現れている。ワトキン宛の書簡でハー

ンは独特の美意識でルイジアナに触れて、まるで花で飾られ死んだ花嫁が口づけを求めているような一種退廃的な美を醸し出していると述べている。<sup>7)</sup>冷たく陰気な北部を捨てて、彼はニューオーリンズの熱帯の美に夢中になり、自然豊かで美しいが眠っているように活気のない南部の不思議な魅力の虜になってしまう。荒れ果てた貧しいニューオーリンズの町並みも周囲を威圧するような大自然の姿も、ハーンにとって新鮮なロマンティシズムを体現する不思議な魅力に満ちていた。

ハーンが夢中になったのは熱帯の不思議な異国の美しさであった。しかし、彼は単に熱帯の雰囲気陶醉するだけではなく、常に自己鍛錬によって限界まで切磋琢磨する作家としての情熱を心に秘めていた。南国の異国的な美の形や色の魅力を的確に捉え言葉で表現することが彼の使命であった。同時に自然に恵まれた南国に囲まれて環境に順応してくると、眠気を誘われるような安住の気分になって想像力が働かないと彼は鋭敏に自戒し矛盾した不満を抱く。ハーンは常に気むずかしく移り気な気性の持ち主で、変わらないのは知的探求心だけであった。文学はハングリーな精神の中で生まれる懷疑や不安の念から萌芽し、陰鬱な山川や海に見られる怒濤の波や不可思議な雲の動きで育成されるので、物質的に豊かで申し分ない環境は、探究し考察する精神を消滅させると彼は複雑な胸の内を吐露することもあった。

記者生活だけに隷従的に依存することなく、作家としての自由と経済的独立を勝ち取るために、ハーンは『アイテム』に勤務しながら貯めた金で大衆食堂を経営する計画を思いつく。新聞記者の仕事に飽き足らなかつた彼は、毎日の骨折り仕事から解放され、各地を自由に旅行し執筆できる環境を求めていた。新聞社に奉公しなくてもいい経済的な独立を獲得するために、ニューオーリンズで一番安いことを売り物にする食堂の経営に乗り出したのである。儉約して貯めた100ドルを投資して『ハードタイムズ』という縁起の悪い名前の食堂を開店し、彼は新聞社から独立して外国へ旅行する自由を夢見ていた。漂泊を続けるための旅費捻出や新聞記者以外の収入を求めて、食堂経営に乗りだし結局失敗するのである。

すなわち、ニューオーリンズでの最初の半年程の経済的困窮が身にしみていたハーンは、商売か投機で大金を手にしたという強い願望を持っていたので、1879年2月に大胆にもニューオーリンズで食堂経営に乗り出した。人に使われるよりも自分で独立した商売をしたいという経済力に対する彼の憧れがあった。何でも一皿5セントというニューオーリンズで一番安い食堂を売り物に『アイテム』にも広告を掲載したが、共同経営者に店の金を持ち逃げされ一ヶ月程で閉店を余儀なくされた。実業家としての才能がなかつたハーンは、既に疑念を抱いていた仲間に結局騙され、有り金全部を盗まれて借金だけが残った。一度熱中すると非現実的になり判断力がなくなるハーンは、信頼出来ると思いこんだ仲間に裏切られたのである。食堂経営で経済力を得て自由に研究と執筆活動に専念したいという彼の計画は、全く現実離れし



た夢の冒険となり見事に失敗に終わった。計画は挫折し彼は単調な記者の仕事に戻ったが、その後も古本屋をはじめ様々な事業に思い巡らした。しかし、結局商才や世間的駆け引きや金銭処理能力が欠けていることを痛感し、もはや文筆の方法以外に生きる道がないことを彼は悟った。実業家としての才能の欠如を自覚し、非現実的な計画を実行に移すことを控えると同時に、彼の心に深い挫折感と失意が残った。人を信じやすく商才もないハーンは、共同経営者に多額の売り上げ金を持ち逃げされて店が破産すると失望し、ニューオーリンズは泥棒の巣であり利己主義な人間を育てる町だと難じて落胆した。南国の楽園と思えた町の裏には、人種のるつぼに巣くう悪弊や病根が存在していたのである。

ニューオーリンズで『アイテム』の編集助手をしながら、ハーンはフランスのゴーチエの翻訳やエッセイの執筆に専念するようになった。しかし、『アイテム』が経営危機に陥ると、ハーンは記事にペンや鉛筆で挿し絵を入れて面白くし読者の獲得に努めた。当時のニューオーリンズの庶民の生き生きとした生活を挿し絵付きの記事にしたものは、1879年から1880年まで2年間続いた。ハーンは社会の不正を容赦なく糾弾し辛口の意見を公言したが、社会の弱者には深い同情心を示した。それまで生彩のなかった小さな『アイテム』は、ハーンの意欲的な記事のおかげで多くの読者を獲得し、3年半の勤務期間中で最初週給10ドルが最終的には30ドルまで跳ね上がった。シンシナティ時代と同じように新聞記事を書いたけれども、ニューオーリンズでは内容が大きく変化し、短編小説風のエッセイが多くなり文学的風味が色濃くなった。1879年9月14日付けの記事「白装束」では好きな墓場のイメージを前面に押し出して読者の気持ちを惹き付け、物の怪のささやきや幽霊の花嫁、狭い路地、澱んだような暑い空気、石のように無言の兵隊達の歩調、夢の中の亡霊の行列、笑みを浮かべた白装束の娘の瘦せた死に顔など、彼はすでに死後の世界という得意分野を十分に意識した筆致で書いている。このように、本来彼が最も興味を持っていた怪奇な記事、霊的な世界を前面に押し出して、シンシナティ時代のセンセーショナルな殺人事件のような社会現象中心の取材記事から、ニューオーリンズ時代では芸術、文化、文学、翻訳と書評などの方面へと記事の対象が変化したのである。

『アイテム』の記者としてハーンは、シンシナティ時代よりも遙かにゆったりとした勤務環境で社説やエッセイを書いた。地方紙であったが多分野にわたる様々な記事や翻訳を掲載していたので、彼は幅広い国際感覚を自然に身に付け、文学研究と伝説や民話の収集を進めた。外国の政治や文学の話題、東洋の諺や習慣、ギリシアやイスラムの芸術、さらにフランス文学の翻訳、スペインや南米の風物などの記事を彼は熱心に掲載した。

論説や書評以外の彼の記事は、新たな土地の風景を見つめて独自の認識を深め、音響に耳を傾け匂いや味をも体験して、ニューオーリンズのあらゆる物に自分の身をさらして得た印象を反芻し、ゆっくりと時間をかけて自

分の想像力で再創造したものである。また、人生の辛酸を舐め尽くしていたハーンは、社会の弱者や抑圧された人々に対して同情の念が強く、社会の不正や矛盾には敢然と立ち上がり、搾取や麻薬の横行、無法のギャングを非難した。さらに、軍事力が国家間の相互抑止力以上の存在になる危険性を予見し、彼は人類の歴史に戦争の不可分を断言している。『アイテム』1881年11月6日では、有史以前から人類が戦争による大量死によって人口の過剰増加を防いできた事実を眼を背けるわけにはいかないと述べている。<sup>8)</sup> また、ハーンは独自の感受性のために多くの偏見や偏愛に縛られていたが、特に怪奇なものや不気味なものが彼の想像力に火を付けた。グロテスクなものに対する不健全な偏愛は、彼の様々な記事にスリルや凄みのある迫真力を生みだした。『アイテム』1879年8月24日では自殺について触れ、また、1880年8月28日でも自殺と回転拳銃に関する不気味な報告を記事に書き、シンシナティの製革所殺人事件での客観的事実の受動的レポートから発展し、能動的に恐怖の事件の雰囲気醸し出すような気味の悪い状況描写や文学的表現力に彼は磨きをかけている。

1879年3月9日では怪奇な雰囲気と悲劇的な愛のテーマを基に異国情緒に満ちた作品を書いた。また、1879年7月23日の記事では書評や文学批評を書き、当時彼がすでに優れた文学的資質を有していたことを示している。文学に対する熱い情熱、公平な判断に支えられた鑑賞能力、そして率直に持論を述べる大胆さを持ち、フランスロマン主義文学の完璧な美の世界を讃美したハーンは、価値のない書物を容赦なく痛烈に糾弾した。反面、優れた作品には熱心な評価を与え、文学的価値を正確に把握していた。純粋美の世界を創造したフランスロマン主義文学を師と仰いだ彼は、1879年11月20日の記事でリアリズムの不道德な精神を批判し、ゾラの作品を怒りと嫌悪を感じさせる醜悪なものだと決めつけている。

シンシナティ時代の有名な「製革所殺人事件」の記事でさえ、実際に現地で死体を見聞したというよりは、後で様々な資料から想像力を駆使して生々しい情景を再現したのであった。当時のハーンは記者としてインタビューがあまり得意ではなかったし、現実を日常性の中で把握し普通の記事に表現できず、センセーショナルな内容や社会の裏通りの世界を独自の感性で表現するのを得意としていた。また、フランス文学から学んだ官能美の情熱的世界に対しては、彼は常に繊細な感性を發揮した。ハーンは古代ギリシアの裸体美を賞賛し、情熱が人間の活力の源泉であるというギリシア・ラテン思想から熱い血の信仰を得ていた。このような熱い情熱的なラテン民族に比べれば、アングロサクソンの情熱は冷たい火花ほどの弱い存在でしかないと断じた。したがって、ハーンによれば、英米の文学は事実の無味乾燥のレポートに終始し、愛は人生を震撼させる情熱としては描かれないが、フランスロマン主義文学では情熱が全ての人生の動因となり結果をも支配して、作品全体に独自の風味を醸し出している。その本質的な部分に永遠に女性的なもの

が存在して汎神論の香りを放ち、自然と人生の関係を情熱的な視野で見つめることを可能にし、雲も森も丘や川も全て女性的な官能美の象徴として描写されていると彼は考えた。

人生を震撼させるような情熱が古代ギリシアの芸術を開花させ、フランスロマン主義文学の情熱的感性の偉大な成果を残すことを可能にしたのである。これらの芸術作品では、情熱が全世界の魂となってあらゆる事物に浸透し、同時にすべての生命に対する優しい感覚が生まれるとハーンは信じた。フランスロマン主義の立場から、ハーンは芸術活動における官能美の重要性を認識していた。彼は卑近な現実生活よりも異国情緒の魅惑や官能美を追い求め、想像力によって芸術的雰囲気を醸し出す洗練された文体や情熱的な技巧を熱心に吸収しようと努力した。

官能美を追い求める彼の文学的情熱は、凝った文体や音楽的な文章表現となって作品に現れた。美しい旋律を奏でるかのようになり、彼は日常的現実よりも異国情緒の世界を描き、未知の土地の民間伝承を細かく取材した。その結果、直接的内容や現実的な事実の表現よりも唯美的で技巧的な世界へと傾き、自分を赤裸々に表出することを避けて自己抑制し文学的殉教者のような傾向を生んだ。本来の熱い情熱を注ぐ対象を持たなかった初期のハーンは、崇拜するフランス文学作家の翻訳にすべてのエネルギーを傾注していた。

作家への野望を抱き続けたハーンは、新聞記者に満足できなかったし、ラテン的な気分や心理を満足させて、南国の楽園に安住することもできなかった。常に疼いていた放浪癖、飽くなき好奇心と知的探究心は、南国の楽園で感情的な主観的ロマン主義に陶醉するだけでなく、生来の学究肌から客観的普遍性を求めて常に彼を未知の探究と野心的な著作に駆り立てた。

正規の教育を十分に受けなかったことで、独学で身に付けた自分の才能を最も良く引き立たせるには、誰も書かないような奇妙な主題を調べて研究し、自分を凡庸以上の存在に高める他ないと彼は自覚していた。ハーンは人前で目立つことを嫌ったが、物語の特別な才能を持っていたので得意な話題は流暢に語る事ができた。彼は文化人の集会では常に黙して聴くだけに徹していたが、誰も余人には語り得ない奇妙で不可思議な事柄に話題が及ぶと、彼は超然とした態度と低くて透き通った声と流暢な言葉を駆使して聴衆を魅了した。彼は優れた記憶力で読んだ本の何処からでも珍しい情報を引き出して、人を惹き付ける不思議な魅力の声と流れるようなリズムで語りかけた。抑制のきいた彼の低い声は、情熱的な炎を秘めていて、冷徹な頭脳で知的に語るというよりは熱い感情で美を熱心に説いた。このような話者としての才能は、後年来日して教育者として講演したり、様々な学校で教壇に立った時に十二分に生かされることになる。教育を途中で閉ざされ、新聞記者の苛酷な仕事の日常の中にもかかわらず、全くの独学で研究を重ね、中国、ギリシア、アラビア、クレオールなどの民話、伝説、風俗

習慣について誰よりも博識になっていた。ハーンは乱読家ではあったが、優れた感性と想像力で様々な書物の精髓を確実につかみ取ることが出来た。また、知的に細分化した専門家集団の現代社会の中で、人間が見失った生命的で情熱的な精神を彼は保持していた。

ハーンはシンシナティ時代からゴーシェ、ボードレー、フローベルなどの19世紀フランスロマン主義文学の作家達の書物の収集を始めていたが、ニューオーリンズでは風変わりな珍本を探すようになり、特にフランス系黒人のクレオール文化、ガンボ・フランス語をはじめ、西インド諸島の風俗や習慣に神秘的な魅力を感じていた。また、母親の国ギリシアの古典や哲学、彫刻の美を研究し、父親の国アイルランドの祖先にはジプシーの血統が混じっていたと考えられていたので、ジプシーに関する本を盛んに読んでいた。さらに、母親の祖先にはアラブの血筋が混じっていると信じていたために、彼はアラブの文化や文学にも強い関心を抱いていた。

このように様々な混血の血筋を受け継いだハーンは、あらゆる人種の奇妙な話題について調べ、自然に異文化や国際理解の立場から諸問題を論じる見識を身に付けた。ユダヤ、コーラン、サンスクリット、中国、エジプト、イランなど世界中の話題の本を収集して、彼はあらゆる国の伝統や民話を調査した。混血であったが、彼は父方のアイルランドの白人の血統よりは、母方のギリシアのラテンの血統に属していると考えていた。奇妙で不可思議な霊の世界への傾倒、異国の未発掘の民間伝承の収集、神秘的ロマン主義思想の研究、近代文明以前の素朴な人間の生態などを記述した奇妙な書物が、彼の作家活動の原動力の源であった。ハーンは奇異な本を独自の想像力と熱心な集中力で読み解き、生命力漲る直観的靈感を得ていた。

彼はフレンチ・クォーターに出没して、黒人女性のフランス語のスラングに耳を傾け、街角で古本を漁ったり、珍しいものや風変わりなもの、特に貧民街の話し言葉のガンボ語を夢中になって調べていた。ガンボ語には社会の裏通りの真実や暗黒面が示されていた。さらに、クレオール文化に生命的躍動を見出し興味を抱いた彼は、ブーザー教のまじないや迷信を詳しく取材して奇妙な記事を書いた。このように、ハーンはフレンチ・クォーターの古本屋で珍本を漁り、風変わりな事柄について調べるのを好んだ。また、彼は多くの人々や資料からクレオールの伝説や歴史についての情報を採集していた。路地裏に住む庶民の言葉や歌にクレオールの思想や感情が存在することをハーンは情熱的な直観で洞察していた。特に彼はフレンチ・クォーターの老人から地域の諺を熱心に収集して『ガンボ箴言集』を纏めた。さらに、地元で古くから伝わる神秘的な悪魔崇拝や異端信仰に惹かれ、彼は執拗に関係者への聞き込みを繰り返し、その信仰の秘密を探り取材した。ブーザー教の秘密集会に入り込み、黒人混血女性の僧侶に直接面接して、この原始的宗教の呪文や不可思議な歌や音楽について調査した。アフリカから儀式的原型を持ち込んだ妖しげな集会は、彼にとっ



て未知の異様な儀式で、その不気味な謎めいた歌と音楽は文明社会には存在しないものであった。誰も扱わなかったブーズ教の秘儀を取材し、黒人音楽の本質にはブーズ教の歌と音楽の独特の調べが深く関わっていると彼は看破した。それは西洋文明社会や白人音楽には全く存在しない音調であり、黒人音楽の故郷のような原始的な哀愁を帯びた野生美に満ちていた。

ハーンの情熱は特に日の目を見ない貧しい庶民の生活と言葉に向けられ、そして彼の文学的感性はフランスロマン主義の魔法の世界への献身的な傾倒に注がれた。現実よりも非現実的な神秘に惹かれる夢想家であったために、彼にとって現代人よりも未開人の素朴な生活の方が不思議な魅力に満ちていた。西洋文明社会の喧噪から離れて、人生の神秘や詩的な宗教を美しく描写し、作家として神の永遠の相に迫りたいと彼は願っていた。原始的な宗教、神秘主義、フランスロマン主義文学、クレオール歌や音楽、原住民の生活習慣などについて調べ、彼は生きた知識として著作に表現した。のどかな牧歌的文学、森の中の孤独な霊、田園に流れる風のような旋律、神秘的な言葉の世界、束縛から解放された荒野の花のような新鮮な美、魔法のような芳香に満ちた不可思議な魅力にハーンは惹かれた。誰も知らない自然界の森の香りと深く関わり、未知の雰囲気を伝えるような著書を書き上げることが彼の望みであった。それは地域原住民の生活の精神を反映した作品であり、彼が惹かれた風変わりな生活は、少数民族の素朴で健全な生活であった。それは時代の流れと共に消え去りつつある文明以前の人間の営みを示している。彼等の神は荒野の神であり、自然界の霊に他ならない。このような神秘的霊界や原始宗教に対する探究心の背後には、フランス文学の魔法のような世界に対する深い愛着とキリスト教会に迫害されてきたという被害者意識と脱西洋の理念があった。

現実社会の時空間に上手く対応できないハーンは、イギリスからニューヨーク、シンシナティを経てニューオーリンズにやってきたが、放浪癖は場所だけではなく時間にも及び、現在から過去、未来への移動は言うまでもなく、あの世、霊魂の世界、想像の世界へ参入しようとする熱い願望が、作品の超絶的傾向を一層強めることになった。フランス文学の翻訳をしながら、彼はニューオーリンズの街並みを一人歩き、スケッチ風のコラムにクレオール文化の特徴、生活様式、言語風俗などを鮮やかな文章で描写した。クレオール人とはハーンによれば、本来初代のラテン系のアメリカ入植者の子孫、すなわちルイジアナに定住したフランス人とスペイン人の子孫であった。しかし、時が経つにつれて、この入植者達と黒人との間に生まれた子供、つまり他の有色人種と区別する名称として、ラテン系入植者と有色人種との間に生まれた人々を意味するようになった。アメリカ南部のニューオーリンズでは愛郷の念が強く地元意識の旺盛な地域であり、ハーンの文学的感性に満ちた記事のしみじみとした筆致が多くの読者に受け入れられた。絵のように美しい古都を心から楽しみ、妖しい月光や白日夢のような

けだるい芳香に満ちた町並みを彼は巧みに記事に取り上げた。<sup>9)</sup>同時に、彼の交友関係も記者仲間から文化人、知識人へと広がり、新進気鋭の文学者として注目されるようになった。

ハーンはワトキン宛の書簡の中で時折自分を大鴉と呼び大鴉の絵を描いている。この頃になると、文学の研究や著作に以前よりも多くの時間を費やすようになっていた。下宿屋で安定した食生活を得てゆったりとした優雅な日々を送り、彼は相変わらず古本屋通いでフランス文学、クレオール、東洋文学や芸術など、さらに多くの書物を買集めるようになっていた。『アイテム』ですでに記者としての定評を得ていたハーンは、食堂経営失敗の借金返済のために仕事を増やして、『デモクラット』にもフランス、スペイン、メキシコなどの文学や新聞などの翻訳と批評をコラムに掲載していた。読者には大変好評であったので、合弁新聞社の編集責任者ページ・ベイカーがハーンを文芸欄の編集長として招聘した。すなわち、1881年12月にハーンは『タイムズ・デモクラット』という新たな新聞社の文芸部長として着任し日曜版の特集記事を担当して、ヨーロッパ文学の紹介、翻訳や書評を連載して好評を博した。入社後5ヶ月程すると、ハーンはゴーチェの『クレオパトラの一夜その他』の翻訳本を出版した。この本がハーン32歳にして初めての著書であったが、あまり大きな反響はなかった。この本の出版以後、彼の記事は後に著書にすることを目標にして書かれる傾向が強くなり、職業作家という彼の人生を賭けた夢が実現可能な段階に来たことを示している。

ハーンは神経過敏で猜疑心が強く、傷つきやすい変人であり、自分の文章には絶対的な完璧主義者であった。自分の文章が少しでも無断で変更されたりすると、見境も無しに相手を罵倒し、特に他人が原稿に無断で変更を加えたりすると大変激怒する癖があったので、編集長も随分気を使ったという。ベイカーはハーンの良き理解者として、他の雑誌社や出版社にも原稿を書くだけの時間的余裕を与えていたので、この時期から彼の文学的才能の本格的な開花が始まったと言える。コラム、論説、批評、挿し絵、翻訳、編集と何でも多様に仕事をこなしていた『アイテム』と異なって、ハーンは文学的な問題だけに集中して仕事をする環境を与えられた。5年半にわたる勤務期間中、日曜版の文芸特集欄の担当を一度として辞めることなく評判も大変良かった。気難しい偏屈ぶりを同情的に理解し文学研究を支援したベイカーによって、時間的余裕を与えられた彼は、文学的問題に集中することで知的に大きな前進を遂げるようになった。多くの蔵書を所有するようになり研究も進み、もはや奇異で風変わりな話題ではなく、彼は文学の本流に関わる作品や評論を手がけるようになった。

モーパッサン、ロティ、フローベル、ボードレール、ネルヴァルなどについて、さらに、西洋と東洋の文学全般についても自由自在に批評や翻訳を掲載してハーンは読者の興味を惹き付けた。このように、彼はアメリカの読者に外国文学を紹介することで文芸欄編集長としての

成功を収めるに至った。原作の世界の雰囲気、魅力、言葉の魔力などを損なうことなく論評し、さらにいかに翻訳を通して原作の魅力を再現するかに彼は最も努力を傾注したのである。『タイムズ・デモクラット』では、彼は『アイテム』よりも遙かに翻訳の精密度を高め、学究的な論説を書くようになっていた。集中的な学問的調査と高い語学力を要する翻訳の仕事を通して、優れた作家の文体には独特の音楽的調べがあり、韻律的な言葉のリズムがあることをハーンは学んだ。言葉の色合い、光沢、音調、響きが各作家に固有の文体と音楽性を生んでいることに気づき、このような語感や語調の相互関係が作品全体の構成に重要な役割を果たしていることに彼は注目した。優れた作家が何年も費やした文学的名作を翻訳することが、単調な骨折り作業であると同時に、非常に難しい学究的な仕事であることを彼は深く認識し、翻訳に付随して作家に関する文学研究を深めた。満足ゆくまで推敲を繰り返し完成度の高い文章を練り上げる彼独自の著述スタイルは、このような経験から生まれたのである。そして、『タイムズ・デモクラット』が急速に読者を増やし重要な新聞社としての地位を固めるにつれて、ハーンの作家的名声も大いに高まった。

北部のアングロサクソンの土地よりもラテン的なニューオーリンズを好んだハーンの執筆活動によって、『タイムズ・デモクラット』はアメリカ南部で最も重要な新聞社になった。彼は翻訳や論説の他に、民族学的研究にも手を染め、伝説や民話などの民間伝承を詳しく調査した。異国情緒に満ちたクレオール伝説や民話は彼の想像力に強烈に訴える魅力があった。さらに、世界各地の民間伝承に関するあらゆる書物を収集して詳細な研究を行い、単なる翻訳ではなく繊細な文章を練り上げて新たな文学作品を生み出した。ハーン作品は、創作の源泉となった原作の書物よりも時代や人々の感情を鮮やかに表現していた。彼の文章は聴覚的美意識によって音楽的響きを保つように細心の注意で書かれていた。興味を抱いた主題に対しては、彼は知的情熱をもって実に学者的な勤勉さで熱心にあらゆることを調べ尽くした。何世紀も昔の人々の思想や感情を現代に再現し読者に体感させることに彼は無上の喜びを抱いていた。昔の寓話、伝説、お伽噺などは、彼にとって幻想文学の純粹美を示すものであり、彼は洗練された文体でこれを表現しようとした。ハーンが熱心に書き上げた物語は、このような創意工夫で読者を惹き付けたのである。

ニューオーリンズのような都会を離れると、神秘と驚異に満ちたレイジアナの自然は、未開で奇妙なものに溢れていた。蟻の列を眺めて自然の営みに触れたハーンは、仲間を中傷したり争ったりしない小さな虫の世界に思いを馳せて、常に全体の利益のために自己犠牲して奉仕する蟻の方が、人間よりも優れていると考えた。どのような場合でも、自分の快樂のために弱い者虐めする者を人類最大の悪と考えていたハーンは、人種や貧富を超えて小さな動物にまでも深い愛情を抱いていた。以前シンシナティからニューオーリンズへの道中でメンフィスに滞

在中に、怒り狂った男が哀れで無力な子猫をどう猛にひつつかんで、指で眼をえぐり出して道に投げ捨てたのを彼は目撃したことがあった。ハーンはその残忍な所業に激しく激昂し、ピストルを取り出して男に向かって何発も撃ったが、視力の悪いせいか当たらなかったという。

感受性の強かったハーンは、小さな動物に対する虐待を憎み、同時に人類の歴史の未来を案じた。熱情的に激昂すると常識的な現実感を喪失するロマン主義者ハーンは、悲壮感と理想が同居していて、猜疑心が深いのにすぐに人を気に入ると信用して騙されたり裏切られたりした。ハーンは心温かく同情心に満ちていたが、反面猜疑心が強く、些細なことで人が自分を侮辱したとか中傷したと疑った。故意の悪意ある言葉に容易に感情的になり我を忘れ激怒した。些細なことでも裏切られたとか侮辱されたと思ひこむ奇癖があり、直情的に激怒し対人関係を閉ざしてしまうことがあった。本来社交的な人物ではなかったが、ハーンは作品執筆のためには様々な知人や友人から多くの貴重な情報を得ていた。しかし、猜疑心と被害者意識が強かったため、些細な感情の行き違いから友情が破綻することがあった。

常に未知の土地へ旅立つ誘惑に動かされ、現状に満足せずに自分を変化させようとする不可思議な精神的渴望を抱き続けたハーンは、新奇な体験を求める冒険に憑かれたような人生から逃れられなかった。夢中になっていたニューオーリンズを徐々に嫌になり始めたハーンは、クレオールやラテン的雰囲気にも次第に飽き足らなくなってきた。港の船を見れば異国への旅をそそられ、ニューオーリンズの雰囲気、南部のけだるい官能的な香りにも飽きてくると、彼は何か別の土地を求める心の疼きを覚えるのである。南国の温室のような眠気をさそう環境では、優れた作品を書けないと現状に満足できない近況を周囲に語り、寒い荒涼たる所へ移ってのみ、太陽の輝く大空や夏の日の風物を懐かしみ、創作意欲を刺激されると精神的渴望を吐露した。このような一カ所に安住できない彼の性癖は、今までも幾度となく飽くなき探求心を鼓舞して、絶えず新たな未知の土地や異文化を求めて放浪を続けなければならない漂白の人生に如実に示されている。

#### 4. マルティニーク島

ニューオーリンズにも記者の仕事にも疲れていたハーンは、休暇を取ってレイジアナの海岸へと向かい、1884年の夏にカリブ海に面したグランド島を初めて訪れて、海に囲まれた新たな土地に新鮮なインスピレーションを得て小説執筆の構想を思い描くようになる。グランド島はアメリカ大陸の文明から孤立した奇妙な自給自足の生活を発達させていたので、産業化した都市生活から見れば異様なものであった。このようなグランド島はニューオーリンズにも疲れ果てたハーンにとって、神の恩恵に他ならずロマンティズムをかき立てる異国であった。



北国への旅行が熱帯育ちの無垢なクレオール少女にどのような影響をもたらすかを描いた『チータ』は、1886年グランド島で書き始められて、その後2、3度訪問する中で、1887年に入ってすぐにグランド島で完成された。作家としての名声が確立しつつあり、南部の新聞社だけではなくニューヨークの出版社ハーバー社にも原稿が採用されるようになると、彼は1887年5月末には『タイムズ・デモクラット』を退社して6月初旬にニューヨークへ出発し、その後西インド諸島への独自取材旅行に向かった。西インド諸島への取材旅行による紀行記はハーバー社が期待した作品であった。長年に及ぶニューオーリンズでの生活を終え、高層ビルの乱立する鉄の都ニューヨークに入り、『ハーバース・マガジン』の編集長オールデンを紹介してくれたシンシナティ時代の友人クレイビール、そしてニューオーリンズ時代の友人エリザベス・ビスランドにも彼は再会している。

南国の呑気な楽園とは対照的に、ニューヨークは圧倒的な富と知力の結晶であり、ハーンは近代文明の最先端の大都会を嫌悪すると同時に驚嘆し賛美した。南国的理想郷を自らの原体験としながらも、不可避の近代化による文明の発展において、人間を鍛錬する北方的で苛酷な生存競争の冷徹な原理を彼は否定できなかった。しかし、スペンサーの進化論を研究するにおよんで、彼は今まで以上に強靱な知的活動を志向し、あらゆる事象を相対性を伴った両極として全体の相において考察した。最初にハーバート・スペンサーの「第一原理」をハーンに読むように勧めたのは友人のオスカー・テリー・クロスビー中尉であった。この事がハーンの思想に大きな影響を与え、彼をこの世のあらゆる主義主張から解放し、大いなる懐疑という慰めで彼の心を満たした。<sup>10)</sup> スペンサーの進化論と来日後の仏教研究がハーン独自の世界観構築の基盤となった。

ニューヨーク滞在数週間後、7月上旬に37歳のハーンは2ヶ月間の西インド諸島への取材の旅に出発した。後に「真夏の熱帯行」に纏められたカリブ海の島々の中でも、ハーンはマルティニーク島に最も魅力を感じたので、サン・ピエールの町にしばらく滞在している。華やかな所など全くないサン・ピエールの町は不思議な魅力を秘めていて、貧しい通りには住民の人情が人目に晒されていて、ハーンは人々の織りなす人間模様に我を忘れて引き込まれていった。彼は少なくともこの町にしか見られぬ主題に接して、人間の根本的な真実に迫ることができた。このように、近代文明の標榜する能率と合理だけの苛烈な競争社会から離れて、ハーンはマルティニーク島での2ヶ月の滞在記を完成し、『ハーバース・マガジン』の編集長オールデンは即金700ドルで原稿を買取った。700ドルを得たハーンは、さらに長期間にわたる取材を計画し、1887年10月から1889年5月まで1年7ヶ月程の間マルティニーク島に滞在する。

アメリカで作家的名声を確立しつつあったハーンであるが、常にアメリカ社会の過当競争に違和感を覚え、白人至上主義の呪縛から逃れたいと感じていた。妻子もな

く孤独な身の上で、様々な経験を積んできたが、行き詰まるような西洋文明社会の束縛から解放されたいという願望を彼は抱いていた。ハーンは島の人々に興味を持ち、彼等を訪問して原始的な伝説や風変わりな伝承を収集した。ハーンはイエズス会の宗教学校で教育を受け牧師になる運命であったが、学業を途中で断念せざるを得なくなった独学の人物であった。優れた文学的業績や作家的才能にもかかわらず、自分の知識や学識をひけらかすようなことなく、彼には全く傲慢や自惚れがなかった。見かけを気にせずに着心地の良い楽な身なりを好んだハーンは、オリブ色の肌で黒髪に黒い眼をしていた。常に簡素を好み控えめに言動し、無学な庶民と親しく話すのを好んだ。彼はむしろ素朴さや無垢を愛し、無知を嫌わず、不実や自惚れを憎んだ。

ニューオーリンズでの歳月はハーンにとって文学的に実り豊かな時期であり、彼は独特のリズムを有する文体を完成させ、自らの文学的使命に自信を深めた。装飾過剰の文章と風変わりな表現は影を潜め、クレオール文化の知識を十分に得て、さらに彼は西インド諸島での取材に意欲を燃やしていた。ハーンにとって、文明や都会は冷徹で非人間的な社会の欺瞞であり、熱帯地方の自然こそ唯一人間の生きる場所であった。多くの不遇な辛い経験の末に、彼は自分が現代生活には不適だと思い知ったので、窒息させるような都会の喧噪と混乱から逃れて、熱帯の島のゆったりとした雰囲気と虚飾を剥ぎ取った昔風の生活の場所に安らぎを求めた。

アメリカ社会の対立と競争、産業資本主義や立身出世主義を嫌って西インド諸島へ向かったハーンは、ニューオーリンズの友人マクスへの書簡でマルティニーク島をこの世の楽園だと絶賛している。マルティニーク島の純朴でのどかな熱帯の生活に陶醉し、性急な生き様、活発な機敏さを要求する西洋文明の生活を激しく憎むようになる。名声、富、栄光とは無縁の生活に触れて、文明社会の生存競争の呪縛から逃れ、彼は初めてあらゆる不毛で不純な要素を取り去り、アメリカ型社会の価値観に厳しい批判の眼を向けるようになった。

ハーンは南国の熱帯を賛美し自然回帰を唱え、近代文明を冷たい不毛の世界と非難した。かつてニューヨークの富と活気を称えた彼は、大都会の贅沢よりもマルティニーク島で飢えていたほうが人間らしいと考えるに至った。不毛の喧噪や灰色の高層ビル、機械がうめく不協和音、疎外と孤立、乾いた都会生活を否定し、彼は南国の自然の輝きの下で自由に生きることを求めた。彼は極めて簡素な生活を送りながら、マルティニーク島の調査と取材で見聞を深め著作のための資料を得ていた。

あらゆる混血の人々、褐色の肌の女性達と親しくなり、島の民間伝承、民話、伝説を収集し、ニューオーリンズ時代から彼はその全てを細かく調査して、全体を学問的に概観するよりは、作家として細部の具体的事例の美的表現に拘った。隻眼で近眼でもあったハーンは、物事を遠近法的な全体の把握より細部の集積に拘るという個性的な精神構造によって、文学研究の方向性を決定づけて

いた。細部の几帳面な個別的な集積が、結果的に全体として鮮やかな生命的描写を生みだした。マルティニーク島での観察と取材活動は、このような立場をさらに強調して常に対象に密着し、情熱的な視点でロマン的情緒に充ちたもので、無機質の冷たい科学的観察ではなかった。熱帯の暑い景色、呑気で安易な生活、子供のように無垢で情熱的な混血の人々の世界に彼は魅せられ耽溺した。ハーンは島の人々を奇妙な未開人とか時代遅れの変り者として描きたくなかったので、島の人々の中に入り込んで島人になりきって島の人々を描くように努力した。この取材と執筆態度は来日以降の作家活動の基本的姿勢ともなった。後年ハーンは自然を理想化するのではなく、自然の隠れた美や人間の悲痛な生き様に対する洞察力を身につけ、異文化理解の作家として新たな感覚を作品化するに至ったのである。ハーンは細分化した専門家や硬直した学者的発想による冷徹な知性で対象を捉えたのではない。狭量な専門家集団ばかりで、全体の相を見て全般を語る人間が数少なくなった時代において、彼が熱情的に細部に拘りながらも全体としての生命的本質を掴んで表現出来たのは、文明以前の人間の先祖が持っていた熱い感性を失わず持っていたことを示している。

マルティニーク島の風景を詳細に描写するハーンの筆力は、以前にも増して対象の本質を燃えるような意欲と想像力で把握し、その作品に対する凄まじい作家的献身ぶりは特筆に価するものがある。細部にまでこだわり丹念に対象を表現するハーンは、サン・ピエールの古風で美しい町の佇まいを見事に捉えている。石造りの家、石畳の小道、熱帯の紺碧の空、明るく黄色に塗られた町並みは、色鮮やかな対照となっている。マルティニークの自然そのものを光と色の沈黙の言葉の偉大な詩と捉え、彼は対照を生彩豊かに表現しようと限界まで苦闘し努力した。島の豊かな自然に直面したハーンは、如何なる巧みな言語表現でも何一つ的確に捉えることが出来ないと痛感する。2度目の訪問で彼はマルティニークの人々の生活風俗に大きな関心を寄せて取材したが、この世の楽園のように絶賛したマルティニーク島は、実際には40度近い暑さと大変な湿度で、山中には無数の虫や虫類がいてハーンも体調を崩す程であった。このような厳しい条件の島を丹念に観察して歩き回って取材した彼は、非凡な肉体と不撓不屈の精神を有する作家であった。彼の作品は島の人々の生態を詩的散文で夢のように美しく捉えており、天然痘で何百人もの人々が死んだサン・ピエールの悲惨な姿を描く際でも詩的情緒豊かに表現している。

マルティニーク島のサン・ピエールでの約2年間の滞在と取材の後、この長期滞在記は『仏領西インド諸島の二年間』として著書に纏められた。熱帯の樹林と古風な町並み、現代的な新しいもの皆無の17世紀の遺物のような町の風景、光り輝く紺碧の海、筆舌に尽くせない熱帯の青空、平和で官能的な現地の人々の生活、全てが彼のラテン的感性に南国の楽園となって強烈な印象を与えた。素晴らしい色彩が視覚に、官能的な熱帯の空気が触

覚に、南国の果実や草木が嗅覚に、クリオールの人々のゆったりした声が聴覚に、暖かく訴えかけて魂の懐かしい故郷を思わせ、楽園の饗宴としてハーンの感性を鋭く揺さぶった。安住することを知らない彼の漂白の魂に救いを与えるかのように、素朴な人間の深い愛情で充滿する至上の楽園が自然に囲まれたマルティニーク島に存在していた。

幼少年期から青年期にかけて悪夢のような苛酷な現実耐えながら、永遠の愛への思慕を募らせていたハーンは、島の人から聞いた昔の逸話を手がかりに、部屋に閉じこもるようにしてひたすら執筆に専念して小説『ユーマ』を書きあげ、黒人の反乱から主人の子供を守るために焼死する黒人女性の自己犠牲的愛を描いた。苛酷な黒人奴隷制度の中にあっても、黒人の少女ユーマは永遠の母性を体現し、聖母のような気高さを漂わせる愛の殉教者である。南国の楽園マルティニーク島に潜む黒人奴隷の暗い過去の歴史、白人による黒人への無情な人種差別の世界、悪徳と憎悪の連鎖の中で勃発した奴隷解放の反乱、このような暴力と殺戮と憤怒の渦の中で、一人の無垢な黒人少女が示した自己犠牲の愛の力は、あらゆる欺瞞や憎悪や偏見を浄化し和解する聖なる力である。死をもって神の愛を实践したユーマの姿は、夜空に赤々と燃える炎に包まれた教会の十字架とイエス像に暗示されるように、真実の愛へのハーンの激しい思慕の念と宗教的情熱を反映したものである。

ハーンのキリスト教嫌いは、白人至上主義と結びついたキリスト教社会の欺瞞と悪徳を糾弾するものであった。宗教的情熱や愛を忘れた自己中心的な偽善や非人間的な戒律による専制的支配を彼は憎み、寄宿制の神学校で受けた非人間的な教育に終生憤慨し続けていた。形骸化された教会制度や不毛な教育を神学校で体験したハーンは、その後も人生の辛酸をなめ尽くしたが、弱者や無名の人々に対する同情を忘れなかった。彼の人間の愛への思慕はキリスト受難の悲劇性と重なり合い、ユーマの献身的自己犠牲の精神とロマン主義的女性崇拜となって作品化された。しかし、小説の価値を論じて、素晴らしい小説は現実生活を反映した真実でなければならないと考えていたが、ハーン自身は後年小説『チータ』(1889)や『ユーマ』(1890)で必ずしも自説を實踐できなかった。ハーンは熱帯を舞台にした小説、すなわち、1848年の黒人暴動のエピソードを基にした『ユーマ』を約3ヶ月で書き上げたが、地域の背景、社会習慣や気候、信仰などについて熟知していたにもかかわらず、小説執筆に不可欠な物語の構成力が弱く精神的理念や思想的動機も欠落していた。『ユーマ』は『チータ』のような情熱に欠け、物語の筋立てが不自然であった。ハーンは物語を構成する能力がないことを自覚し、小説の執筆からは離れて、伝説や民話を原話とする再話物語に活路を見出していくことになる。

1889年5月にハーンは思うように原稿料を得ることができず経済的な余裕に窮するようになり、地上の楽園マルティニーク島に永遠の別れを告げニューヨークへ戻る



ことになる。ニューオーリンズ移住当初でも、以前に勤務していた新聞社へ通信員として原稿を送って食いつなげると安易に考えていたのと同様に、今回も予想したほど原稿料を得ることが出来なかったのである。かってペレー山の頂上に登ったハーンは、四方の山の峰を見下ろした時の壮大な景観と頂上の異様な静謐に感激し、眼前に広がる大地が気の遠くなるような太古から存在し続けているのだという特別な感慨に打たれたことがあった。彼はマルティニークを去る最後の時まで変わらぬ賞賛の念を持ち続けたが、サン・ピエールは1902年のペレー山の噴火で壊滅し、現在では彼の著書でのみ当時の面影が偲ばれるのである。ハーンにとって世界で最も美しいマルティニーク島を去るのは断腸の思いであった。遠隔の島にいては出版社と思うような相互理解が計れないと考えたハーンは、今後の西インド諸島の取材計画を相談するためにニューヨークに戻るが、二度と再び島に戻ることはなかった。ニューヨークに入った瞬間に、大都会の貪欲な鉄とコンクリートの獣のような機構の中で呪縛されて、すっかり自己のアイデンティティを失ってしまう。ハーンにとって、西洋文明や進歩は人間の目を眩ませ、耳を聳して悪夢のような呪われた都会を作り出していた。アメリカの鉄とコンクリートで荒れ狂う大都会にいと、マルティニークの熱帯の自然が何処までも彼に付きまとい、青い海の彼方へ、巨大な椰子と褐色の肌の女性達への思いが、再び熱帯の島への気持ちを強めるのであった。恐怖に駆られてニューヨークを去り、フィラデルフィアの眼科医グールドのもとに居候して、彼は10月上旬まで『ユーマ』や西インド諸島関係の作品を完成させることに専念した。

1887年4月フィラデルフィアから眼科医グールドはニューオーリンズのハーンに翻訳文を賞賛する手紙を送り、同情的な関心から目の健康について多くの助言を行って交友関係が始まった。ハーンはこの医者自分を同じような情熱的な人物だと思いこんでいた。しかし、グールドは正反対の人種で、情熱的な誇張表現でも衝動的な機知でもひたすら理知的な態度で科学的に厳粛な事実として分析しようとする人間であった。教義主義者で科学的功利主義を信奉し、倫理的にも硬直した考えの持ち主で、ハーンをピューリタンの堅苦しい道徳で縛ろうとした。

ハーンは誰とでも交友関係を結ぶ人物ではなかったが、頼れる知的な数人の友人を常に必要としていた。シンシナティではワトキンとクレビール、ニューオーリンズではマタスとペイカー、オールデンであった。ハーンはグールドにも頼れる友人としての役割を期待し、グールドもハーンを自宅に招いて滞在させた。しかし、ギリシア的美の信奉者のハーンに、グールドは論理的必然の現実世界では美は無用有害だと説いた。グールドのピューリタンの厳しい倫理とアングロサクソンの論理性が、ハーンのラテン的美の信仰を押しつぶそうとしていた。グールドによれば、ハーンは言葉のあやだけの作品を書いており、その非論理性は矯正されるべきものであ

った。ハーンも最初は自分の優柔不断な性格の弱点や現実処理能力の欠如による不運や失敗を、グールドのように強力に知的訓練を受けた友人によって救済されることを願っていた。グールドの強い支配下で世話になったため、彼は借金の担保として貴重な蔵書を譲り渡す取り決めをしていた。文学的感性は正確で常に的を得ていたが、ハーンは現実に対する処理判断に問題があり、よく人間関係に失敗した。この交友関係の破綻とその後のグールドによる中傷的発言は、彼の典型的な処世の欠陥を示したものである。グールドの人格的影響力から外れてはじめてハーンは自分を取り戻したが、蔵書の帰属をめぐる論争は両者の関係を疑惑と中傷という最悪の事態を生み、彼の死後も醜聞のごとき感があったが、最終的にグールドはハーンの遺族に返還した。

『チータ』の後『ユーマ』を完成させて、ハーンは新進気鋭の作家として文壇に登場した。さらに、1890年3月には『仏領西インド諸島の二年間』が出版されて、作家として成功の道を歩む時に、再び彼は未知の土地へ放浪の旅に立つのである。小説『チータ』と『ユーマ』が結局それ程高い評価を得ず、自分の本領ではないと感じたため、異文化探訪の作家として日本取材旅行に彼は新たな可能性を模索したのである。

## 5. 日本

ハーンは『タイムズ・デモクラット』に戻ることもできなくなり、ニューオーリンズ時代より文通があった『ハーパーズ・マガジン』の美術編集長ウィリアム・パットンに面会した。パットンは日本通でハーンに英訳『古事記』を読む機会を与え、この時期以降彼は来日を前提にして日本に関する文献を多く読むようになった。マルティニーク島に2年程滞在し現地体験記事や紀行文を纏めて後、彼は極東の国日本に思いを馳せるようになる。このような日本研究からハーンは、日本に行けば西インド諸島でした仕事よりも優れたことができると確信する。従来の日本関係の印象記とは異なった新しい方法で日本を取り上げ、いきいきとした生命的な味わいのある書物を書くことを彼は計画した。日本で実際に生活しているような生きた感覚を読者に伝えるために、単なる傍観者としてではなく日本人の生活の中に入って日本人の考え方を体験できるような物語を書きたいと彼は考えた。

パットンに日本への取材旅行を勧められたハーンは、すでにシンシナティ時代に日本に関する記事を書いていた。さらに、1884年にはニューオーリンズでの産業万国博覧会を取材した時、彼は日本文化の展示コーナーで日本の事務官服部一三と親しく話し合い、会場で説明を受けた日本の民芸品に深い感銘を覚えた。ありふれた展示物でさえ彼にとって特別に不思議な魅力を持っていた。この時、既にハーンは日本や東洋についての書物を買ひあさり研究を続けていたので、服部とほぼ対等に話し合

えるほどになっていた。ローエルの『極東の魂』など日本に関する著書を彼は丹念に勉強していた。したがって、従来の日本旅行印象記とは異なった視点から幅広く日本の文化伝統を庶民生活の中にまで入り込んで取材したいという抱負が以前から彼にはあった。ハーンはパットンに日本取材計画の概要を示している。今までの日本印象記とは全く異なった著書を念頭に置き、日本の庶民の生活の中に入り込んで日本人として暮らし、日本人の思考をしているかのような新しい観点から日本についての本を書こうという意図を明確に伝えている。<sup>111</sup> ハーンの小説の特徴は異文化空間を偏見のない眼で詳細に観察し、その文化と歴史を庶民感情に至るまで見事に作品として再現する点にある。小説のような物語の構想力よりも現地取材を基にしたエッセイや紀行文、あるいは民話伝説に基づく再話物語に彼の才能は最も効果的に機能したのである。

ハーンの日本への思慕は単なるロマン的な異国趣味を超えたもので、漂白する魂の求道者として、魂の救済や霊的治癒の場としての日本との出会いを彼は求めていた。失われた母の面影は見知らぬ日本の面影となり、マルティニーク島での楽園の至福は、彼の記憶の中で永遠の相との出会いを意味した。ハーンは一度も会うことのなかった弟ジェイムズに宛てた手紙の中で母親に触れて、鹿のような大きな茶褐色の眼をした浅黒い顔を記憶の中で辿り、ギリシア正教による父と子と聖霊の三位一体の祈りを教えられたと述べている。さらに、父親を愛さなかったこと、全て自分の中の善なるものは黒い種族の魂から生まれたもので、正義を愛し悪を憎み、美と真を追究する芸術的能力や文学的能力も母親の血筋から生まれたと断言している。<sup>112</sup>

このように失われた母の面影を辿り、楽園を思慕するかのよう丹念に続けられた事前の日本研究から、ハーンは日本に対する独自の霊的なビジョンを既に抱いていた。書物から得た日本の風物や庶民の生活、仏教と神道の敬虔なる信仰と神々の神話の世界が、彼の感性と想像力に強烈に訴えかけ、漂白する彼の魂を揺り動かし、西洋近代産業の病根から遠く離れた幻の国日本への旅立ちを決意させた。ニューヨークから逃れるように、今度はマルティニーク島に帰るのではなく、遙か海の彼方の東洋の島国日本へ行くことになる。

熱帯の島での取材がおおむね完了したこともあり、厳しい暑さと湿度の気候風土での長期滞在が、40歳に近づくハーンにとってすでに限界になっていた。さらに、アメリカそのものとの関係を絶つかのよう、ワトキンやビスランドの例外を除いて、アメリカ時代の交友関係を彼はほとんど全て捨て去る。これ以上アメリカでの人間関係や作家活動を維持できなくなり、またビスランドへの淡い思慕の念が叶えられない恋愛感情になったこともあり、人間関係の処理の仕方が非常に下手で行き詰まった彼は、さらに新しい環境を必要としていた。

1890年3月8日にハーンはニューヨークを出発し、4月4日に横浜に到着した。カナダ太平洋鉄道が全面的に協

力することになり、ハーバー社の挿し絵画家ウェルドンと二人でモンリオールからバンクーバーまで寝台車で移動し、そこから汽船で太平洋を渡り横浜へと向かった。開通してまだ3年の鉄道会社は無料の切符と250ドルを支給して鉄道旅行を宣伝してもらおうと考えていた。ハーンと挿し絵画家のウェルドンによって、日本人の奇妙で不思議な生活を巧みな文章表現と絵で捉えた最高傑作が生まれるはずであった。11月にはモンリオールからバンクーバーまでの旅を綴った「日本への冬の旅」を『ハーバース・マガジン』に彼は掲載している。バンクーバーからの汽船での太平洋横断の17日間は退屈な日々の繰り返してその単調さに彼は随分と閉口している。しかし、取材についての取り決めはあったが、ハーバー社との正式契約はなく、前払い金もなかったため彼の不満は爆発した。日本への取材旅行はハーン個人のものでハーバー社は何の責任もないということであった。ハーンの作家としての評価は定着しつつあったが、彼の自己評価ほどに出版社は高い評価をしてくれなかった。新たな取材への熱意にかられて、彼はこの事を十分に認識できなかった。一つのことに熱中すると忘我的状態になり、正確な対人関係や事務処理、判断能力が的確でなくなる彼の性癖が示されている。

日本での活動の経済的支援の裏付けがなかったことにハーンは疑心暗鬼になった。ハーバース社の条件はあまりに自分にとって不利で理不尽であると思い、全てが自分を陥れる陰謀のように彼には思えてきた。ハーンはハーバース社と絶縁し、日本渡航を世話したオールデンにも非難する手紙を送った。彼は自らアメリカと絶縁するように以前の友人とのつながりを絶った。マタス、コートニー、バイカーとも縁を切り、さらに来日以前にゲールドとも絶交した。例外的に死ぬまで文通で交流を続けたのはビスランドとヘンドリックの二人だけであった。彼は住居を移転し職場を変えるたびに、今までの人生に区切りをつけるかのように、親しく交流していた人物と絶交したり疎遠になって、我が身を古い絆から切り裂くかのようにして、新たな人生の新天地に立ち向かうのであった。

アメリカ時代に独自のニューオーリンズを描き出したように、ハーンは来日以降も独自の日本観を表現した。ニューオーリンズの実像を詩人的感性で把握したように、明治日本の諸相を細部に至るまで取材し、庶民の生活の中に入り込んで日本文化の真髄を捉えようとした。現地人と共に生活し現地にとけ込むことでアメリカ南部の作家となったハーンは、日本に帰化して作家小泉八雲にもなり得たのである。この意味において、アメリカ時代のハーンの姿は日本時代の作家活動を説明する重要な手がかりを与えている。

ハーンのアメリカ時代の生活は、貧困の中で野心的な新聞記者として苦闘する過程で、作家として大成する基盤を養った実り多き模索と準備の時期であった。作家としての文学研究と文章の鍛錬のために、人生の目標を見据えて奮闘する張りつめた緊張と失意の連続であり、不



幸な生い立ちと長い下積みの明と暗の繰り返し、彼の矛盾した複雑な個性を形成するに至った。現実主義と夢想家、強引な生き様と根深い劣等意識、信頼と不信、神経質な変人と上機嫌なコスモポリタン、楽観と悲観、純粹と偏屈、博愛と偏愛などのハーンの諸相は、人生の各段階においてカメレオンのように目まぐるしく変化した。確固たる人脈も学閥もなく、自分を支えてくれる強力な縁者や支援者もなく、また的確な処世術や打算を持たなかった孤立無援の彼は、このような矛盾した有り様で自己の全存在を賭けて逆風の多い人生と戦ったのである。来日以降は教育者としての人格的陶冶に励み、作家としても文学的見地や文章に円熟味を増し、東西文化の差異や日本文化の明暗へ厳しい批判の眼を向ける文明批評家となった。ハーンは終生、母親のギリシア、ラテン、東洋世界に惹かれ、冷たかった父親への反発から反西洋、非人間的な神学校での屈辱的な日々への反感から反キリスト教を標榜し仏教研究に没入していった。白人の物質文明社会の中で辛い下積み生活を送ったので、彼は西洋文明全般に対する強い憤りと不信の念を募らせ、何よりも脱西洋としての東洋世界の神秘に全身全霊で帰依しようとしていた。20年もの間19世紀フランスロマン主義文学を研究してきたハーンは、生来のロマンティズムとスペンサーの進化論を弁証法的に援用し、異文化研究や情操教育における想像力の重要性を力説した。

黒人の歌や日本の門つけの盲目の女の歌に、崇高な宗教的感情を独自の審美意識で直観的に把握するハーンは、魂の浄化や救済としての音楽の効用に対して特別な聴覚的能力を持っていた。宗教的感情は審美意識を高揚させ、自己犠牲の愛は最も崇高な美の具現である。日本時代の彼は審美意識を崇高な宗教的感情と融合させ、聖なる母性のイメージは日本女性に対する彼の絶対的な畏敬の念となった。

従来日本について書かれた本は、視覚のみに頼った夢物語のような印象記にとどまっており、日本旅行記でありながら、その中に日本人は存在していなかった。欧米でのハーンの評価が低いにもかかわらず、日本では高い評価というアンバランスがあるが、世界的な再評価の気運の中で日本独自の自信を深めつつある。常に欧米の先進文明を批判し、反キリスト教の立場を鮮明にし、日本文化を高く評価していたことがハーンに対する西洋の根強い反感の原因であった。魂の漂泊者、世界の探究者、異界への冒険者として来日したハーンは、詩人的洞察によって、西欧化に邁進していた明治期の日本の変革と動乱を見つめた。英語で書かれた彼の数多くの著書には、詩人的感性で消え去る旧日本の魂の息吹が哀切の情をもって描かれている。日本でも示した庶民に対する同情、草木や虫の世界に対する繊細な共感などは、漂泊し苦悶してきた彼の魂の原体験から本能的に生まれたものである。特に松江の宍道湖の夕日や隠岐島の絶壁と海は彼の詩人的感性に鋭く訴えかけ、日本の風物に対する彼の審美感を深め、心の故郷ギリシアの島と海を幻のように彼に想起させた。マルティニーク島での取材と執筆活動の

延長であり最後の完成と終焉の地が、彼の理想と幻想の国日本であった。ハーンは独自の詩的審美感で進化論的考察と宗教意識を融合させる考察を続けていた。しかし、理想と幻想の楽園は消えゆく旧日本に見られたが、近代化に突き進む新日本は、西洋の利己的な個人主義と非情な生存競争を模倣することに没頭していた。寒さ故に松江を去って後、消えゆく旧日本の精神を体現する山陰の町をハーンは懐かしみ、常に日本理解の大きな手がかりとしていた。

### (注)

- (1) E.L.ティンカー 『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』(木村勝造訳、ミネルヴァ書房、2004) p.5.
- (2) E.スティーヴンスン 『評伝ラフカディオ・ハーン』(遠田勝訳、恒文社、1984) p.42.
- (3) 『ラフカディオ・ハーン著作集』第1巻 (恒文社、1980) p.34.
- (4) 同書、第2巻、p.269.
- (5) E.Bisland (ed.) *The Life and Letters of Lafcadio Hearn* (Houghton Mifflin, 1906) vol. 1, p.45.
- (6) 『ラフカディオ・ハーン著作集』第1巻、p.66.
- (7) 同書、第5巻、p.362.
- (8) E.L.ティンカー、前掲書、p.48.
- (9) 小泉八雲『クレオール物語』(講談社学術文庫、1991) p.176.
- (10) E.Bisland (ed.) 前掲書、vol. 1, p.85.
- (11) 田部隆次『小泉八雲』(北星堂、昭和25年) pp.175-7.
- (12) 『ラフカディオ・ハーン著作集』第5巻、pp.423-4.

